

## 令和3年度 第2回小田原市社会教育委員会会議概要

- 1 日 時：令和3年（2021年）10月27日（水）14：00～16：00
- 2 会 場：小田原市生涯学習センター本館 第2会議室
- 3 委 員：木村議長、笹井副議長、有賀委員、金子委員、倉澤委員、高橋委員、平井委員、深野委員、箕輪委員、山岸委員
- 4 職 員：鈴木文化部長、尾沢文化部副部長、湯浅生涯学習課長、藤澤生涯学習課副課長、林主事  
（事務局）中村生涯学習課副課長、相澤主査
- 5 傍聴者：なし

### 6 概 要

#### 1 文化部長挨拶

鈴木文化部長から挨拶をした。

#### 2 報告事項

##### （1）第6次小田原市総合計画行政案について

資料1-1・1-2に沿って生涯学習課長が報告をした。

#### 3 協議事項

##### （1）地区公民館について

資料2から6に沿って生涯学習課長が説明をした。

**【深野委員】** 地区公民館の役割という原点に戻る話というのは非常に難しい。歴史のことを御説明いただいたが、鈴木十郎市長はなかなかの人だったと思う。小田原市発展のために、あの時代の小田原市の財政基準から考えたら信じられないくらいの公共投資をした。発展する小田原にお金をどんどん投じ、それを回収できた時代だった。それを考えると、今は人口20万人規模の都市を総合計画で掲げているが、19万人を切っている小田原市がどうやって20万人に戻れるのか。生まれるより死ぬ人の方が多い。生まれる人を増やすしかない。先日、文化レポーターの集まりで面白い話を聞いた。二宮町にはいろいろなことをやっている人がたくさんおり、町が元気だと。なぜかと言えば、外から来た人達がいろいろやっている。なぜ二宮にみんなが来るのか。町営住宅を安く貸している。例えば2軒借りてベランダをつなげて1軒として住む等の借り方ができ、子育て世代の30代40代の方がどんどん移住してきてフリーマーケットや子どもの遊び

場を作ったり、いろいろな活動をしているのだと聞いた。地区公民館の役割を考えたときに、誰が使うのかということが一番の問題である。お年寄りが集まって趣味の会をやるというニーズも満たされないといけないが、人口 20 万人都市を目指すという今の総合計画を考えると、それではまったく十分ではない。若い子育て世代をいかに他から引っ張ってくるか。その人たちが何かをやろうと思ったときに、そのための場がない。PTA の保護者が何かしようとした場合などは、学校も一つの場であると思うが、地区の人が何かしようと思ったときに、地区公民館があるじゃないか、あそこ便利だよねという魅力を持たせないといけないのではないか。役割の中身を議論するならば、誰がその役割を担うのかと考えることが重要である。もっと子育て世代を巻き込むことができないかという切り口が必要である。

**【木村議長】** 今は違うのだが、昔、穴部公民館では管理人を置いていた。その時は、住民が公民館費を払い、その中から人件費を出していた。その代わりに、管理人が運営から何から全部行っていた。今の地区公民館は、館長はいるが最終的には鍵の管理が問題になってくる。みんなに鍵を渡してしまうと後が大変。本当は地区公民館を使いたいのだが、学校やコミュニティセンターなどの方が電話で連絡して予約できるので楽である。本当は地区公民館に誰か管理人がいるともっと使いやすい。公民館長はまだ仕事をしている人が多い。昼間はいないので、夜に使用の電話が集中する。公民館長の気持ちとしては、仕事をしていたら、とても公民館長はできないと言っていた。先ほど生涯学習課長が説明していたが、地区公民館数は最盛期に比べると減っている。それは館長のなり手がいないから。住み込みでなくてもいいので、地区公民館にある程度常駐してもらおうと利用率も上がるのではないかとはい思う。いつ行っても地域の人が使えという状態にないと、なかなか難しい。地域の方が学校にシフトしているのは、そこには常駐している人がいるからである。今のほとんどの地区公民館は、館長が鍵を持って雑用等も行うのが現状なので、そこをうまく改善できればいいなとは思っている。地域の人でも自分たちで公民館費を払っているので、本当は地区公民館を使いたいという気持ちはある。自治会を抜けるわけにもいかないのに、お金は払うが、それで全然地区公民館を使ってないと住民も怒る。使いたいのに、使い勝手が悪い。そのあたりを公民館の役割としてみなさんと議論できたらと思う。

**【深野委員】** 妻がお世話になっている先生が元箱根にいる。先生の家が公民館なので、管理人ではないが先生が鍵を預かっている。貸館の予定については館長が管理する。鍵の管理の役割と、貸館の管理の役割を別にしていく。それはうまいやり方だと感じた。固く考えないで、機能を分けて考えるのも一つのアイデアとしてあるのではないかと。

- 【金子委員】 自分の地区の公民館では、現状、使いたいという需要があまりないという印象である。先ほどの公民館の成り立ちの話にもあったが、地区公民館は当時の住民たちがお金を出しあって建てた大きな遺産である。それを使わずに朽ちるのを待っているのはいいことではないので、これを機会にもっと地区公民館を使ってもらえるようにしたいと思った。鍵については、自治会傘下の部会や珠算教室に渡している。昔は管理人が公民館に住んでおり、3畳ほどのスペースがある。どうしても管理人が必要であれば、自分が仕事を引退した後にそこで暮らせるかなとも思っている。自分は地区公民館の役割として、「学習の場」ということがずっと頭にあったのだが、「子どもの居場所」としての役割もあるのだとわかったので、これからは子ども会にも働きかけて反応を見てみたいと思う。
- 【有賀委員】 私がお世話になっている地区公民館では、公民館の前に住んでいる方が鍵の管理をされている。その方が、今日何時にどんな団体が使うのか把握されているので、公民館に行けば鍵が開いている。使用後に声を掛ければ、その方が鍵を閉めてくれる。全部の使用スケジュールを把握されているので、利用者としてはすごくありがたい。
- 【生涯学習課長】 鍵の管理について参考事例としてお話する。生涯学習センター豊川分館と上府中分館を廃止する時に、鍵の管理を地域の人にお任せするというのを1年くらいやっていた。豊川分館では、ダイヤル式のキーボックスの中に鍵を入れ、利用者には使用料を払いに来た時にそのダイヤル番号教えて、自分たちで鍵を開けて入ってもらった。豊川分館については、そのようにして鍵の問題を解決した。上府中分館については、分館の土地を持っているのがいつでも玄関が空いているお寺だったので、そこに鍵を取りに行き、使い終わったらお寺に返すというやり方であった。
- 【木村議長】 セキュリティはどうなっていたのか。
- 【生涯学習課長】 キーボックスの中に鍵と一緒にセキュリティカードも入れていた。キーボックスの番号だけ覚えていればいい状態であった。
- 【木村議長】 今、小田原市では、子ども会がほとんどなくなってしまった。子どもを集めたくても、子ども会がないのでなかなか集められない。自分の地区の公民館長からも、小さい子どもを集めれば、保護者もついてくるから賑やかになるのではないかという話ができるが、そのつてが無い。民生委員に声をかけたこともあるが、今でも忙しいのでそこまでできないと断られた。せっかくみなさんが公民館のお金を払っているのだから、なんとか活性化しようと試みたことがあるのだが、なかなかいいアイデアが出てこない。
- 【笹井副議長】 先ほどのキーボックスで鍵を管理するのはなかなかいいアイデアだと思った。ダイヤルの番号を定期的に変えれば不正利用も防げる。また、入口に防犯カメラをつけて、誰が入ったかを記録に残しておくようにするとよいのではないか。管理としては、誰か一人に任せるのではなく、複数の

人で管理するのが一番いいとは思いますが、そういう人がいない時には、機械の力を借りるのもよいと思う。先ほど、終戦直後の公民館の話があった。自分は、この寺中作雄氏が課長であった時に課長補佐をされていた方をよく知っており、その方から社会教育法を作った時の苦労をよく聞かされていた。当時の人たちは公民館にもものすごく思い入れがあった。昭和21年に寺中氏の通達があり、その4・5年後には全国の公民館数は1万館を超えたというデータがあった。公民館を建てようということが政策として掲げられていたのは確かであるが、1万館も増えたということは、地域の人たちがそれを求めていたということである。そういう思いがあった地区公民館が小田原に多く残っているのは、本当に素晴らしいことである。これは何らかの形で将来への遺産として有効活用した方がよいと改めて思った。前回の会議でも出たが、管理の問題がネックになっているという議論がある。それはその通りであるが、一律にはではなく、できることから、何らかの方法で乗り越えていけたらいいのではないかと。

【倉澤委員】 地域の拠点としての学校と地区公民館の違いは何かということについてだが、地区公民館は128館あり、学校は小学校で25校であるということになる。地区公民館は地域に身近な場所であることは確かである。例えば、自分が災害時に住まいから避難する時、学校より公民館の方がより近い。そう考えると、地域の話し合いや学び、集うということにおいて、地区公民館という場所はこれまでとても機能してきたのではないかと感じる。それが世代を経る中で、段々使われなくなった。今は一人に負担をかけるということが厳しい時代である。地区公民館の管理についても、一人より複数で担うということがポイントであると思う。自分の自治会にも公民館長がいるが、毎年代わる。公民館長だけではなく、公民館部という複数の人で対応するようにはなっている。また、子育て世代や高齢者世代など、使う方たちの層を増やしていくことがとても重要である。さらに、世代間交流も重要である。子育て世代の若い親だけでは孤立してしまうし、高齢者世代だけの活動であると、発展性がなかったりする。地区公民館の役割として、世代交流の場の提供ということも必要であると思う。ただ、その活動を支援する必要もある。一つ目の支援は、人を育てること。公民館活動の中心になるような人が育つためには、こちらの方から意図的に、それぞれの地区に、例えば公民館活動サポーターとか、そういう人を養成する必要がある。誰かいませんかという募集だけでは厳しい。もう一つの支援は、活動を育てること。他の地区公民館がどういう活動をしているか知らない人もいるので、ある地区の公民館ではこういう活動をしているということを紹介して、みなさんの公民館でもしてみませんかと声をかける。この二つを公民館活動の支援として意図的にプログラムしていく必要があるのではないかと感じている。

- 【木村議長】 これからは70歳まで仕事をする時代になってきているので、なかなか公民館長のなり手がいない。自分の地元では、小学校や中学校のPTAを巻き込んでいる。地元の住民を頼りにしようと思ったら、そこまでしないと、とてもじゃないができない。地区公民館が建設され始めた戦後すぐと今は時代が違う。建設当時はみんなそこに集まっているいろいろなことをしたと思うが、時代が変わるとどうしてもそのような集まりが衰退してしまう。
- 【高橋委員】 128館の公民館が市内のどこに点在しているのか、分布図が欲しい。後継者がいないという話があった。これについては、自分達が小さいときに自治会や子ども会に面倒を見てもらったことがあり、自分が親になった時にそれを次の代に引き継いでいこうという気持ちが少しでもある人を大事にしていくことが重要ではないか。今の若い親の、さらにその親世代が、自治会や子ども会で恩恵を受ける機会が薄い世代だったのではないか。だから、その世代の子どものである今の親世代に伝わってない。その部分を遡って取り戻せと言ってもできないので、これから新たに、今の親世代にゼロから教育していかなければ、後継者がますますいなくなってしまうのではないかと懸念している。次の年代、その次の年代に引き継いでいきながらやっていかないといけないと思う。先ほどから公民館の鍵の話が出ているが、公民館の隣に住んでいるのが若い夫婦だったら、鍵を預かってくれるかといえば、難しい。お年寄り自分が自治会や子ども会で恩恵を受けて育ってきているから、「ああいいよ。」と首を縦に振ってくれる。そういう人の数を増やしていかないといけないのではないか。
- 【平井委員】 今の子育て世代の若い保護者は、地域との結びつきが薄い。昼間は仕事に出かけ、夜会うこともない。休日は家族でどこかへ出かけてしまい、地域の人と顔を合わせる機会自体が少ないという状況である。このような中で、どういうタイミングで地域の中で一緒にやっていけるかと考えた時に、自分の自治会は防災関係で若い世代を引っ張り出そうとしている。地域の拠点としての学校と地区公民館の違いであるが、小学校区と連自治体の地区が重なっているところはうまくまとまるのだが、小学校区がいろいろな地区にまたがっているとなかなかまとまらない。そうになると、地区公民館を頼りにするしかないのだが、一般の方から使いたいという意思を感じないので、どういう働きかけをしたらよいかわからない状態である。今の若い保護者は横のつながりがある。学区を超えて他の地区の方と、生涯学習センターや交流センターに行くなど、活動範囲は広がっているが、地域の中でやろうという話はあまり聞かない。こういう方に地域の中で活動して欲しいとは思っているが、なかなかいい知恵が無い。
- 【箕輪委員】 施設の管理の面で言うと、若い世代の人は、地区公民館をどうやって借りたらいいのかわからない。ずっとその地区で育った人はわかるが、若い世

代はいろいろなところから引っ越してくる人が多い。建物があるのは知っているが、いつ誰が使っているのかよくわかっていない。そこをうまく宣伝できるとよいのではないか。予約についても、知らない人の家に行ったり、電話をかけるのはハードルが高い。マロニエやいずみは自分の好きな時間にネットで予約ができるので、借りやすいし、わかりやすい。だから若い世代が使うとしたら、どうしてもそちらに集中してしまうのではないか。鍵の問題については、キーボックスはとてもいいと思った。知らない人の家に行き鍵を借りるのは、はじめの一步のハードルが高い。ただ地区公民館は、地域のものなので、その地域の人しか借りられないという条件でネット予約にするなどしないといけなかなと思う。担い手については、先ほど倉澤委員がおっしゃったような、公民館サポーターの考え方はとても素晴らしいと思う。多くの人、公民館の使い方がわからない、何をやっているかわからない、隣の公民館で何をしているかも知らないという状態になってしまっている。せっかく地域の財産としてこれだけたくさん地区公民館があるのだから、横のつながり作り、地域の資源の再発見・掘り起こしにもつながるのではないか。世代間交流という面から考えても、若い世代は横のつながりがあるので、誰か一人が網にひっかかれば、その友達や周りの人達も引きずられてやってくる。今までのように、奇抜な誰かひとりが管理を担うのではなく、幅広く、みんなが担えるような形で、ネットワーク的なつながりができると面白くなっていくのではないかと感じている。

【山岸委員】 自分には息子が二人おり、それぞれ嫁がいるが、二人とも他の地域から来た。なので、地域にはもともとの知り合いは誰もいないのだが、最近連れ立って児童館に行っている。地域の児童館だけでなく、遠くの児童館まで行っている。SNS等で、この児童館はこれが充実していると聞いて、遠くからその児童館に集まってくる。地区公民館をどのように使うのかという議論の中で、小田原の場合、18万8千人の人口に対し地区公民館が128館ということなので、1館あたりおよそ1,470人の計算になる。その中に若者が何人いるか。若者をターゲットと考えるならば、若者がそこに行く意味が必要である。通常、人は小さなコミュニティで何かをするよりも、もっと大きなところに集まる。では地域でないといけないことは何だろうか考えると、こじんまりとしたイベントしかできない、そうすると外からは人は来ない。先ほど二宮町の話が出たが、なぜ二宮町は若い人の活動が活発かという、町営住宅で思い切ったことをできることを面白がった人達が外から来たことで活性化したということだった。今の議論で、使うのは地域の人に限定しましょうという形にしてしまうと、二宮町のようにはならないのだろうと思う。地区公民館で何をするのがよいのかという視点がないと、この議論は難しい。地域にはどこにも居場所が無

い子どもが必ずいる。自分は福祉の立場のものなので、その子たちの居場所があるといいなと思うのだが、そうするといつもその場に誰かがいないといけなくなる。昨日は誰かいたけど今日は誰もいないとなると、子ども居場所になれない。そうするとまた元の話に戻ってしまい、これは本当に難しい話だと思う。解決策はないのであるが、まずは誰が地区公民館を使うのかという議論をしないと、その先がぼやけてしまう。

【木村議長】 どの館も行事をやるといって、芸能祭や文化祭、お年寄りのお茶会や盆踊りなど、固定化されたものをやる。二宮町のように新しいものをやれるかといって、難しい。もっとオープンに、地域の人じゃなくてもいいから使ってくださいよということになればいいのだが、自分たちが払った公民館費で運営している施設をオープンに使うのは現状では難しいと思う。お城のあるところは封建的といいますが、小田原市では難しいという印象である。自治会も、みんなに公民館を使ってもらって、賃料をもらえば運営費の足しにもなると考え方を方向転換していかないといけないが、一人二人反対意見があると、じゃあやめようということになりがちである。市内どこの館も地元の方から公民館費を集めて運営していると思うが、そうするとどうしても払っている人が使うのが当たり前だろうという話になってしまう。ここの視点を変えないとなかなかよくなっていかないのではないか。

【深野委員】 自分は今組長をやっている。自治会に入っていない人は当然いるが、どうい人かといって、まずはお年寄りである。自治会の役員はやれないから入らない。次は外から来た方。活動の範囲が広いので、地元に関心はなく、地元で何かやるということはずない。それからアパートに住んでいる方。仮住まいだからそもそも自治会に入る気はない。こういうパターンが多い。自分も仕事で東京から小田原に来たが、地元の人との結束はとて強い。公民館はその地元の1,500人くらいのグループのためにあるという発想のままだと、先ほど例に挙げた、自治会に入っていない人たちは完全に蚊帳の外になってしまう。二宮町の例が興味深いのは、移住してくる人たちが活動的で新しく変えていく力を持っているということである。小田原の人口がどんどん減っている中で、人口20万人を目指すなら、考え方をもっと開放的に変えないといけない。それを仕掛けていく人がいないといけない。学校には地域コーディネーターがいる。公民館を拠点とした、公民館活動のための地域コーディネーター的な役割の人がいて、地元の人と移住者の区別や、自治会に入っているかないかの区別なく、特に子育て世代を狙ってこのコーディネーターがいろいろ仕掛けていくということをやらないと、新しい公民館の機能の活用、展開は生まれてこないのではないか。

【木村議長】 地元から公民館費を集めないで、自治会に入っていようがないが、どこ

に住んでいようが、公民館自体が人を集めてそこからお金をもらって運営するのが理想。自治会に入っている人からのお金で運営しているとどうしても制約がある。そこがネックである。そこをどうやっていくか。一つの例で、自分の自治会では、自分たちで記事を書きたい人を集め、広告料をもらって回覧板を作っている。年間で65万円から70万円くらいの収入になるので、それを貯めておいて、年一回まちづくり委員会の人に、一人当たり3,000円から4,000円くらい還元している。受け取った人からは、今までボランティアでお金をもらったことがなかったからと、とても喜ばれている。PTAの若いお母さんや役が終わった人に声をかけると、年1回3,000円から4,000円でも喜んでやってくれる。公民館の役割は人が集まること。地元の人でもそうでなくても、その場でいろいろなことができることが一番いいことだと思うので、最終的には公民館費を自治会の人から集めず、自分たちで模索して集めるのがよいのではないかな。確かに始めるときは大変である。回覧板の広告を集めるときも、最初は地域の人だけという発想だったが、地域だけでは埋まらないので、知り合いを頼りに販路を広げていった。今では掲載の順番待ちの状況である。始めたきっかけは、自治会の中に変わった人がいて、自分たちで作らないかという一言からだった。それから、役員達を集めて、みんなで手分けして始めた。誰かがちょっとスイッチを入れ替えるとうまくいくことがある。一番いいのは住民からお金をもらわないで運営することだが、実際にはなかなか大変である。

- 【金子委員】 自分の公民館では、公民館費として自治会費と別にとってはならず、自治会費の中から必要に応じて出している。
- 【木村議長】 自治会費の中から公民館の費用を出すにしても、自治会に入っている人からどうしても文句が出る。
- 【金子委員】 地域の活動に参加して、公民館を使いたいという人は自治会にも入ってくれると思う。移住して来た方がいるときは、我々も働きかけている。そこで入らない人はそれなりのポリシーがあって、その後も入らない。それにもかかわらず、みんなと一緒に公民館を使いたいというのは、できないと思う。
- 【笹井副議長】 社会教育法20条に、「一定区域内の住民のために」という言葉が入っている。公民館は一定区域の住民のために教育を行い、文化の振興や社会福祉の増進に寄与することを目的としている。学区区に対比して、公民館区という考え方がある。歩いて10分くらいのところに公民館を作りましょうということで、全国一斉に公民館を作ったという経緯があり、地元の人たちでお金を出して運営するのが定着している。ところが、その当時は農村の時代だった。農業共同体と言うのは移動をしない社会である。生産する場と消費する場が同じという状態がずっと続いたが、高度経済成長期

以降、人々が移動する社会になった。今は交通手段も発達し、隣町から車などですぐに来られる。そのような時代に公民館区という考え方は馴染まない。これについて、どこの自治体でも、どうしたらよいのかという問題があり、みなが知恵を絞っているところである。全国的には、みなさんが移動する時代になったのだから、もう少し緩く、他の地域から来た人が使ってもいいじゃないかという流れになってきている。みな住んでいる場所だけで完結しているわけではない。他地域の方はある程度費用を負担してくれれば使ってもよいとしていくことが大事だと考える。さらに、活動内容についても、もう少し緩く考えてよいと思っている。公立の公民館や、放課後子ども教室等は教育の場ということで飲食禁止だが、このように地域密着型で自治会が運営している地区公民館では、ある程度の飲食や遊び、議長がおっしゃっていたような広告料などのお金集めはいいのではないか。以前この会議でも長野県松本市の例を紹介した。松本市は自治公民館なのだが、ある自治公民館では、地域のお年寄りが集まって携帯電話のストラップを作って売っていた。わずかであってもお小遣いが手に入ることが嬉しくて、みなそこへ集まってきて作っているとのことだった。公立の公民館だとなかなかできないが、民営の施設であるからこそ可能なのだろうと思う。地区公民館では、公立の公民館ではできないことをやってみるといいのではないか。例えばフリーマーケットなどをやると、若い人も集まる。これも公立公民館ではできないことである。このコロナ禍で、今までと同じように集まるということができないからこそ、このような創意工夫ができないかなと思う。

【木村議長】 確かに、コロナ禍であるから何もできないと言うのは簡単だが、もう2年間も今のような状況である。各地区の公民館もここ2年間はほとんど活動がない。役員が1年で交代する館は、何も活動しないで役員が終わってしまう。2年間何もやっていなくて、いざ来年何かやろうとするととても大変である。コロナ禍でできないことももちろんあるが、何かしら継続して活動しておかないと後々困ると思う。このところ新型コロナウイルス感染症も少し落ち着いてきて、地域も動き出してきた。少しずつでもいいので地区公民館で何か活動ができればと思う。

【有賀委員】 自分が関わっている豊川地区の子育て支援グループの活動事例についてお話しする。このグループは0歳から3歳くらいまでの小さなお子さんと保護者が登録しているのだが、先日も新たに1組増えて現在20組の親子が登録している。親子で集まるだけではなく、そこには常に民生委員やボランティア会の方もおり、小さなお子さんの面倒を見たり、子どもの見守りをしてくれたり、交流の場になっている。月2回であるが、楽しみながら参加してもらっている。コロナ禍で子育て広場の活動がなくなってしまい、孤立している若い保護者が多いというニュースもあった。気軽

に話をしたり、悩みを共有できる場の提供がこれからもずっと必要であると思う。本日の資料にも、公民館は人づくり、地域づくりに貢献していると書いてあった。地区公民館を有効活用することで多くの住民が、たくさんの方々のつながりの中で有意義な時間を過ごせばいいなと思っている。

【木村議長】 様々な意見をいただいたが、時間になったので、本日はここまでとして、次回またみなさんと討議を続けたいと思う。その他事務局から何かあるか。

(事務局から次回は書面会議であること、今後の対面の会議としては例年通り2月を予定している旨連絡)

【木村議長】 それでは、本日の社会教育委員会会議はこれを持ちまして閉会とさせていただきます。